

キリストだけは共にいてくださる

ルカ 2:1~7

今日はキリストの降誕に関して必ず出てくる飼葉桶に寝かされた御子イエス様の場面です。赤ちゃんが馬小屋で生まれたこと自体、普通ならありえないことですが何故馬小屋で生まれなければならなかったのか考えるとそこに人間のエゴと罪が見えてきます。

先ずそもそもヨセフとマリアが生まれ故郷のベツレヘムに身重であるにもかかわらず向かわなければならなかったのは住民登録のためでした。住民登録とは人口調査と共に軍事や税金を取り立てるために人々を管理するための制度でした。そしてこの人口調査では、人々はそれぞれ自分の生まれ故郷で登録をしなければならなかったのです。ナザレからベツレヘムまで約110キロの道のりがあります。豊中から和歌山あるいは赤穂のあたりです。身重のマリアを連れて徒歩でどれぐらいの時間がかかったことでしょうか。徒歩で野を超え、山を越えということで大変なライフイベントだったと思います。それもこれも皇帝アウグストゥスの出した命令によるものでした。アウグストゥスの思惑で事が進んでいるのです。言わば皇帝アウグストゥスの権力と富に対する強い欲望がヨセフとマリアを強いてベツレヘムに、そして馬小屋に向かわせているのです。

次にマリアが馬小屋で出産せざるを得なくなった理由は「宿屋には彼らのいる場所がなかったから」です。これを読むと人口調査のためおおぜいの人が小さな町におしかけたため、どの宿屋も空き部屋がなかったと解釈できます。降誕劇では、身重のマリアを連れてヨセフが宿屋の主人とかけあう場面が出てきます。どの宿屋でも、「うちはいっぱいだ。他をあたってくれ」「何？子どもが生まれそうだって？他のお客さんの迷惑になるから、お断りだよ」「おまえたち、ずいぶん貧乏な身なりをしているが、宿賃を持っているのかい。人口調査の期間中はいつもの倍の料金だからね。お金がないなら、野宿でもするんだね」などと言われ、どこの宿屋でも断られたというのです。

しかし、聖書には、この「客間」ゲストルームが宿屋の客間だとは書かれていません。それに降誕劇に出てくる宿屋の主人も実は登場しません。するとこの客間は宿屋の部屋でなく、ヨセフの親族の家の客間だったと考えたほうが自然に思えてきます。何故ならベツレヘムは今でこそキリスト降誕の地として有名な観光地ですが当時はそれほど有名な地ではありませんでした。エルサレムから南に10kmほどのところにありましたから宿泊するとしたら多くの方はエルサレムに行きました。実際のところ当時、「宿屋」はそんなに多くはなく、あったとしても、けっこういかわしいところだったようです。人口調査のような突発的なイベントの時は生まれ故郷ですから多くの方は親戚、親族の家に泊まったことが推測されます。ですからヨセフも、ベツレヘムに行った際は、きっと親戚、親族の家を頼つたろうと思います。ところが、こちらの親戚でも、あちらの親戚でも受け入れてもらえず、たらい回しにされたのでしょうか、親戚の家には泊めてもらえなかったのです。生まれる子供は救い主であると伝えていたかもしれませんが、しかしそのことよりもひょっとしたら未婚のまま子供を宿したということで悪い噂が流れていたのかもしれない。宿屋で断られるよりも、血のつながりのある親戚、親族に断られるほうが、もっと辛いものだと思います。しかし、ヨセフはそれにもめげず、親戚の家の家畜小屋でもいいからと、無理を言って、そこに泊まったと思われまふ。まさに人のエゴが、欲望が、あえて言うなら人の罪がマリアとヨセフ、そして御子イエス様を馬小屋へと追いやったとも言えるのではないのでしょうか？

そして、その夜、マリアは出産しました。神の御子がこともあろうに、人の住む部屋に入れてもらえず、家畜小屋、実際はほら穴でお生まれになったのです。このお方は、ユダヤの王としてお生まれになったのに、ユダヤの人々は自分たちの王を斥け、迎え入れなかったのです。ダビデの子孫として生まれたのに、ダビデの町ベツレヘムの、ダビデの血をひく親族からも、受けいれられなかったのです。王として、親族として受けいれられなかっただけではありません。人間扱いもされず、家畜小屋に追いやられたのです。じつに、救い主はお生まれになったときから、「疎外される」という苦しみの道を歩まれたのです。

聖書は、いたるところで救い主の苦しみを預言し、描写していますが、その中のひとつ、詩篇 22:6 にはこうあります。「しかし、わたしは虫です。人間ではありません。人のそしりの的 民の蔑みの的 です」誕生のとき家畜のように扱われた救い主は、十字架にかけられるときには、家畜以下のもの、人間によって駆除され、家畜によって踏みつけられる「虫」のように扱われたのです。

人が味わう精神的な苦しみの中で、いちばんつらいのは疎外され、無視され、拒否される苦しみだろうと思います。人は、たとえ自分の苦手なことや、好まないことでも、それが誰かの役に立ったり、誰かに認められるなら、苦しいことにも耐えられます。ところが、どんなに人のために努力しても、それが無視される、いや、その人の存在そのものが否定されるなら、やりきれない気持ちになります。人には、それぞれの姿形が違ってするように、それぞれに能力の違いがあり、個性の違いがあります。しかし、すべての人が人として等しく受け入れられなくてはなりません。

あるところで、こどものためのクリスマスの催しがありました。百名ものこどもがいたのに、ステージに立つのはたった四、五人だけで、他のこどもたちはみんな黒い服を着せられ、「その他大勢」という役割をさせられました。ある親が、「人数が足りているんだったら、うちの子は、風邪がみなので出なくていいですか」と責任者にきいたら、「いやいや、やっぱり、人数がほしいから。みんなとっしょに、座っているだけでいいから」と言われたとあってがっかりしていました。この親は、「座っているだけでいい」という言葉を聞いて、大勢の子どもたちが、木や石のような、命のない舞台装置のように扱われたと感じたということです。子どもであっても大人であっても、若い人であっても高齢者であっても、男性であっても女性であっても、人であれば、人として扱われないことほど苦しいことはありません。

イエスほどの素晴らしいご人格の持ち主はありませんでした。イエスは愛とあわれみに満ちたお方でした。公平で、謙虚で、柔和でした。イエスほど知恵と力を持ったお方もありませんでした。その教えは万人に通用する権威ある教えでした。イエスは病人をいやし、嵐をしずめ、死人さえ生きかえらせたお方です。それなのに、人々は、イエスの人格を否定し、その知恵や力さえも認めなかったのです。わたしたちは、そのことの中に、イエスの苦しみをみます。そして、自らの救い主を疎外し、無視し、拒否することによって、自分の救いを失っている人間の罪を見るのです。

主イエスは神ですから、自分を受け入れなかった人々、神に逆らう人々に天からの罰を与える権威、権利がありました。しかし、そうはなさいませんでした。むしろご自分を疎外し、無視し、拒否する人々に報復することなく、逆にその痛み、苦しみをじっと背負われたのです。なぜそんなことをされたのでしょうか。それは、ご自分が疎外され、無視され、拒否されることによって、疎外され、無視され、拒否されている人々を救うためでした。実際、イエスが手を差し伸べた人々は、取税人、遊女、病人、障がいを持つ者、やもめ、女性、子ども、ガリラヤの人々、サマリアの人々といった、当時のユダヤの社会では人々から疎外されていた人々でした。イエスは、だれであっても、決してみかけで判断なさらず、人をそれぞれかけがえのない人格として重んじられました。イエスのもとに来た人々は、例外なく、イエスに受け入れられました。私たちは誰であっても、どういう立場にあったとしても、孤独を感じる時、受け入れてもらえない悲しみと怒りを感じる時があります。私はこの一年を振り返ると多くの恵みを神様からいただいたことを感謝します。また今年は特に神様のもとに召される人が多かったことも覚えます。教会員そして教会の友、教友を合わせると8名に及びます。改めて、人は一人で生まれてきて、一人で死んでいくものであることを思います。真実な思いとしてはいつまでも一緒にいてあげたいと思いますし、いつまでも一緒にいてほしいとも思います。しかし厳粛な事実としてこの世における私たちの人生は始まりがあり、終わりがあるのです。だからこそ私たちが信じ求めるなら永遠に共にいてくださる主イエスのことを覚えたいと思います。キリストだけは共にいてくださるのです。

共に居てくださるイエス・キリストについて続けて話をしますとイエスご自身は、人生の最後、十字架に

架けられる時には人々に受け入れられませんでした。弟子たちでさえ、イエスを見捨てました。人々は、死刑囚のバラバとイエスの「どちらをゆるしてほしいか」と総督にきかれたとき、「バラバをゆるせ。イエスを十字架につけろ」と叫びました。人々は、神の御子、救い主を、強盗よりも悪い人間、いや人間以下のものとしてしりぞけたのです。そして最後にイエスは神からも見捨てられました。十字架で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」マタイ 27:46 と叫ばれたとき、イエスはほんとうに父なる神から見捨てられたのです。人が神から斥けられる。これこそ究極の「疎外」です。しかし、イエスがこの究極の「疎外」を味あわれたのは、それによって、神から遠く離れている人々を、すなわちすべての人を神のもとに連れ戻すためだったのです。

聖書は言います。「恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしがあなたを助ける。——主のことば——あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。」イザヤ 41:14 救い主みずからが「人ではなく虫」のように扱われたのを耐え、神の前には「虫にひとしいような者」を、あがない、救ってくださったのです。

イエスはその誕生のときから、人々に望まれず、歓迎されず、疎外されてきました。ルカは、救い主の誕生が御使いによって知らされたのに、救い主を礼拝したのは羊飼いのほかなかったと言っています。マタイでは、東方の博士たちがユダヤ人の王を拝みにきたのに、当のユダヤの人々はそのことを迷惑なことと考え、その存在を心の中から消し去ろうとしました。ヘロデ王は実際に剣でその命を奪おうとさえしたのです。ヨハネ 1:10-11 はこう言っています。「この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」クリスマスは喜びのときなのに、じつに悲しい言葉です。

しかし、聖書は続けてこう言います。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。」ヨハネ 1:12 クリスマスは、イエス・キリストを「救い主、また主」として、自分の心に、生活に、人生に受け入れるときです。神の子どもとして生まれ、愛する子どもとして神に受け入れられていることを喜ぶ日です。ですから当然、信じている者となってわたしたちは御子の誕生を祝うことができるのです。神を信じ、信頼していないのに喜びと平安だけは下さいというのは矛盾しています。まだイエス様を救い主と信じ受け入れていない方がおられましたらぜひ信じてください。聖書のことばを受け入れ、従ってください。すでにクリスチャンの方にとっては神様の恵みは尽きることがありません。2022年のクリスマス、新たな神様の恵みを味わわれますように。祈ります。